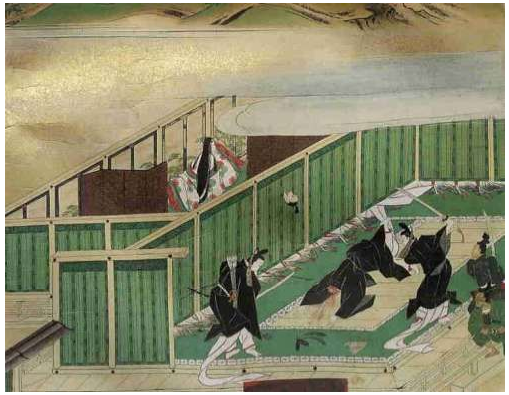
茜色の歌姫

第一部　乙巳の変

戊申に、天皇大極殿にに御ます。古人大兄侍り。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、昼夜剣持けることを知りて、俳優に教へて、方便り解かしむ。入鹿臣、咲ひて剣を解く。入りて座に侍り。（中略）中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄嗟」とのたまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意、剣を以て入鹿が頭肩を傷り割ふ。入鹿、御座に転び就き



多武峰縁起絵巻

て、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起（た）ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦水庭に溢めり。席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。（『日本書紀』巻第二十四）

第四章　箸墓の夜

645

年が明けた。

吉野宮より飛鳥の王宮に至る道沿いに、着飾った民人が、輿に乗った大海人皇子をひとめ見ようと、ずらりと並んでいた。

もっとも、輿は、簾を垂らした天蓋に覆われ、皇子の姿は見えない。その周りを、皇子の舎人どもと、吉野宮まで出迎え、道を先導する中臣鎌子の伴部が随伴し、前後を矛を構えた兵が固めていた。先頭には法師が数人、経文を唱え、その後ろに鉦や鼓を鳴らす楽人どもが続く。

華やかな行列は、民の歓声に包まれ、一路、都へと向かった。

皇子は、簾越しに、なだらかに広がる苅田や、飛鳥を包む山々や、ところどころに築かれた大王家の塚（墳墓）や、たかだかと聳ゆる寺の塔を見た。

やがて輿は、飛鳥岡本の地に新たに建てられた大王宮の門をくぐった。

二町（約180メートル）四方の庭に玉砂利が敷き詰められ、中央に太極殿が聳え立ち、その屋根は檜皮で葺いてあった。屋根に板を敷き詰め檜皮を葺く技術は、おそらく百済より渡来した技人の工夫か。大官の邸とて茅葺きである。莫大な財と夥しい人手を要したに違いない。

板蓋宮。

人々は、新たなる王宮をそう呼んだ。

輿は、太極殿の前で降ろされた。高床の太極殿に登る幅広い階梯に、華やかな袍や裳を纏った官人どもが並んでいる。

大海人皇子は輿を降りて、階梯を登った。広間は三十歩（約50メートル）四方ほどの奥行きがあり、左右に王族・大官が並び、奥まった中央に椅子が置かれ、坐しているのは、齢三十路半ばの女王、宝大王であった。

皇子は、あらかじめ中臣鎌子に教わったように、大王の御前に進み出、片膝を突き、両手を前に組み合わせ、三度、床に額ずいた。

「大海人皇子なるか」

大王が、鉄のように甲高な声音で言った。貌を上げ、大王を見た。髪を結い上げ、勾玉を吊した冠を戴き、細い眉、切れ長の険（けん）のある眼、太い鼻梁に、紅を塗ったうすい唇。豊満な四肢、瓜のような胸乳。

「はるばる伊勢より、よくぞ還った」

還る……。皇子は再び叩頭しつつ思った。吾は、飛鳥に……還ってきたのか？

訪たのではなく？

大王はそのまま無言で立ち上がり、広間を出で、奥の寝殿へと消えた。寝殿は大王の起居する場で、采女や女嬬の他は入ることはできない。

皇子は貌を上げた。ふと、一番奥の左に坐した、蘇我鞍作の姿が皇子の眼に映じた。鞍作は親しげに微笑み、わずかに顎を動かして退出を促した。

皇子は立ち上がり、踵を帰した。

大海人皇子は、板蓋宮を出た後、再び中臣鎌子に導かれ、二里（約1キロメートル）ほど離れた河辺に向かった。そこに、葛城皇子の宮があるという。その葛城皇子の宮に隣接して、大海人皇子のために新たに仮宮が建てられていた。

「まずは、葛城皇子を訪いたまえ」

中臣鎌子はそう言い残して去った。太極殿には、暦のうち、五と十のつく日の朝に参内すればいい。

葛城皇子は、大海人皇子にとっては異母兄に当たる。亡き田村大王と宝大王の間に生まれ、やがては大王位に即くべき皇子と見なされている。

その日は、旅の疲れもあり、すぐに寝んだ。

翌朝、大海人皇子は、舎人の村国男依と朴本大国を伴い、馬に跨り、葛城皇子の宮を訊ねた。

果たして、葛城皇子は不在であった。

「いずくに？」

問うと、葛城皇子の舎人は応えた。

「蹴鞠に」

大海人皇子も二人の舎人も、蹴鞠の何たるかを知らなかった。

蹴鞠の場を教えられ、皇子は畦道をゆるやかに馬を進めた。

初めて訪れた飛鳥の王都。ところどころに建てられた宮や寺の壮麗さは、伊勢の及ぶところではない。だが、その他はただ、苅田が広がり、民が行き交うのみ。道沿いに市が立っているが、

伊勢の浜や津で開かれる市ほどの賑わいもなく、並べられた品々もひどく貧しい。
伊勢の市には、海を伝って運ばれた珍しい異国の品が並んでいた。そういうものが、見あたらない。民の暮らしは、伊勢の民のほうがよほど豊かなのではないか。

林の間を抜ける道を進むと、広やかな野が行く手にあった。
不意に、男どもの雄叫びが響いてきた。大海人皇子は思わず馬を停め、村国男依と朴本大国は腰の剣に手を掛けた。
「行こう」
大海人皇子は気を取り直して舎人どもに言った。軍の吶喊ではなさそうだ。
野に出ると、三人は再び馬を停め、眼前の光景に眼を見張った。
まだ寒いさなかに、およそ三十人ばかりの男どもが、袴ひとつで、上半身を曝し、口々に喚きながら走り回っていた。
「あれが……蹴鞠？」
男依の呻きに見れば、男どもは、首に赤い巾を巻いた者と、白い巾を着けた者と二手に分かれ、一つの鞠を奪い合っていた。
赤巾の男が、手にした鞠を大きく蹴った。宙に浮かんでは落ちる鞠に、赤巾と白巾の男どもが一斉に群がった。鞠を受け止めた赤巾の男が、野の隅に立てられた白旗に向かって走り出した。白巾の男が駆け寄り、抱きついて押しとどめようとする。赤巾の男は横に並んで走っていた別の赤巾の男に鞠を投げて渡した。鞠を受けた赤巾の男に、さらに白巾が群がる。

白旗とは反対の方角に、赤い旗が立てられてあった。白旗の手前で、赤巾の男から鞠を奪った白巾の男が、赤旗めがけて大きく鞠を蹴った。
赤巾の男たちは、ほとんどが攻めに出ており、守りは手薄になっていた。赤旗近くで待ちかまえていた白巾の男はなんなく鞠を受け止め、赤旗めがけて蹴った。鞠は赤旗の竿に命中し、旗は地に倒れた。
白巾の男どもが、わっと歓声を上げた。
「この度は吾らの勝ちよ！」
一人の白巾がそう叫び、躯を折って荒く息を吐く赤巾の一人に駆け寄った。
「子麻呂よ、去年の冬の仕合の勝ちに驕り、伴部どもの鍛錬を怠ったか」
「皇子よ」
子麻呂と呼ばれた赤巾の男が言い返した。
皇子……。その声を聞き、大海人皇子は舎人どもと貌を見合わせた。
「皇子は、ようも吾等を欺きたもうた。わざと攻めさせ、一手で勝ちを得られた」
「策よ、策。ただ力押しに押すだけでは、軍には勝てぬ。策を練れ、佐伯子麻呂よ」
皇子と呼ばれた白巾の男は大笑し、佐伯子麻呂の肩を叩いた。
「吾は、宮に戻る。板蓋宮にて、年賀の宴に出ねばならぬ」
言い捨てて袍を纏い、木立につないだ馬に跨り、ふと、こちらを見つめる三人に気づいた。
「おお！」
さっと馬尻に鞭を当て、大海人皇子に走り寄った。

「汝は大海人皇子よな。吾は葛城皇子」
大海人皇子は眼を見張った。
その名は、蘇我鞍作から聞いてきた。亡き田村大王と宝大王の間に生まれた唯一の皇子。年はたしか五歳上。
葛城皇子は、あたり憚らぬ大声で続けた。
「板蓋宮で汝を見た。汝は、初めて大王に拝謁し、のぼせすぎて吾がいたことを覚えておらぬのだな」
昨日、太極殿に登った大海人皇子を出迎えた王族のなかに、葛城皇子も混じっていたらしい。
再び、鞠を蹴り始めた男どもを振り向き、葛城皇子は言った。
「蹴鞠を見たことはなかったか？」
葛城皇子の勢いに気圧されていた大海人皇子は、やっと声を発した。
「伊勢にては」
「いずれ、汝にも教えよう。ただの遊びではない。軍の鍛錬になる」
「軍？」
驚く大海人皇子に、葛城皇子は豪快に笑い、言った。
「あの旗を倒すには、どう兵を動かすべきか、策を練っては試し、試しては練る。いずれ、吾も汝も、兵を率いて戦うべき時が来るやもしれぬ。その折りに備えねておくべきであろう」
吾が宮で伴に昼餉を。葛城皇子はそう言い、馬を進めた。

宝大王に似ている。
女嬬が運んできた飯を盛った笥に、かぶりつくように食らう葛城皇子を見つめながら、大海人皇子は思った。
「大海人皇子よ」
葛城皇子は笥より貌を上げ、問うた。細長い眉、茅で削いだような鋭い眼、うすい唇。整った鼻梁のみが、大王の貌とは異なっていた。
「今宵、板蓋宮の大王の御前で、年賀の宴が開かれる。汝も出るのか？」
「否」
大海人皇子は首を振って応えた。
「招かれておらぬ故に」
「汝は采女なるものを知るや？」
「……采女？」
「諸々の国より集められ、常には内裏の奥深く籠もっている女どもが、年賀の儀式に限って、その姿を人前に見せる。大王宮での宴など、豪族どもの取り引き駆け引きの場。つまらぬ豪族どもの策になど、吾は関わりあいたくないが、采女のほか、内裏に仕える女どもの美まし貌を眺めるは悪くない」
亜那を飛鳥に随れ去った鏡郎女の姿が眼に浮かんだ。鏡郎女は、大王宮に仕えると言っていた……。
「兄なる皇子よ」

大海人皇子は、異母兄をそう呼んだ。
「吾も、その宴に出たい」
「汝も采女を見たいか」
葛城皇子は大笑した。
「弟皇子よ、吾が舎人の装にて随れて行こう」

夜。
板蓋宮の庭には、ところどころに篝火が焚かれ、太極殿での朝議にも召されぬ小豪族も集い、酒に酔い、歌をうたい、舞い踊っていた。
太極殿の広間には、宝大王ほか、王族や大官のみが昇っている。葛城皇子の舎人に扮した大海人皇子は、独り、庭の隅に佇んでいた。
葛城皇子は、太極殿で大王の傍らに坐し、酒杯を干している。皇子に向かい合うようにしてひときわ大声をあげているのは蘇我鞍作か。
ふだんは人前に姿を現さぬ、内裏に仕える女どもが、年賀の宴にのみ、王宮の庭で舞を披露する。そのなかに、亜那がいるのではないか。その希みだけで大海人皇子は、板蓋宮の年賀の宴に忍び込んだ。
酒には、いまだ慣れない。酔って貌を赤くした誰とも知れぬ者が、何か喚きながら、たまに皇子の杯に酒を注いで去って行くが、口をつけるでもなく、ただ、人々の虚ろな騒ぎを眺めているしかなかった。

「弟なる皇子よ」
背後でそっと肩を叩いた者がいた。振り向くと、葛城皇子だった。
「程なく、采女の舞だ」
大海人皇子は、胸の鼓動が早鐘を打つのを感じた。
大きく銅鑼の音が響いた。庭にいた人々が、一斉に塀際へと移動を始めた。庭の中央に、丸くぽっかりと穴が空き、人垣がそれを囲むかたちとなった。
静まった庭に、再び銅鑼が鳴った。
太極殿の階梯から、白い裳を靡かせ、十幾人の采女が、蝶々がいっせいに飛び立ったように、庭に舞い降りた。
楽人の奏でる音に合わせ、輪になった采女どもの舞が始まった。
ため息をもらして采女どもを見つめる多くの眼が、静かに、しかし隠微な雰囲気を醸し出していた。そのなかにあって大海人皇子は、眼を凝らし、采女たちの舞を見、亜那の姿を求めた。
舞い踊る乙女たちのなかにあって、ひときわ鮮やかに身をくねらせて踊る一人の采女に、眼が停まった。長く垂らした髪が乱れ、貌がよく見えない。皇子は足を踏み出し、さらに見た。采女が身を折り、大きく笑んだ貌を、一瞬こちらに向けた。
……鏡郎女。
志摩の津で見た、袴を穿き、結い上げた髪を後頭部で馬の尾のように垂らし、剣を帯びた姿ではない。巫女のような白装束、露わな腕、手には笹だけを持ち、くるぶしまで覆う裳裾を巧みに揺らめかして優雅に舞うその女は、確かに、鏡郎女であった。

「鏡郎女……」
傍らで葛城皇子が囁いた。
「弟なる皇子よ、汝もやはり、あの采女を、より美ましと見るか」
振り向くと、じっと鏡郎女を見つめる、葛城皇子の眼差しがあった。冷たく、それでいて燃えるような眼差し。それは決して、恋うる女を見るそれではなかった。
「来よ」
葛城皇子は、大海人皇子の袖を引いた。

太極殿の裏手は柵に囲まれ、矛を携えた兵どもが守っていた。
葛城皇子は名乗りをあげ、拝礼する兵どもの肩を磊落に叩き、手に提げていた酒の壺を渡した。やがてささやかな宴が始まり、夜の寒さに耐えかねていた兵どもは、歌い踊り始めた。葛城皇子は、酔って騒ぐ兵どもを尻目に、素早く、内裏の方へと、大海人皇子の袖を引いて走った。
大王の起居する内裏のさらに裏手に、高床の小さな苫屋が幾つか並んでいる。内裏に仕える女どもの住まう家と見えた。男はいっさい出入りを禁じられ、警護の兵の姿も見えない。
「あれぞ」
ひとつの家を指さし、声を潜めて耳打ちするなり走り出した葛城皇子を、大海人皇子は慌てて追った。家の戸には、閂が架けられている。葛城皇子は、腰に提げていた斧で、閂を壊し、なかに入った。
「汝も、疾う、入れ」

呆然と立つ大海人皇子を、葛城皇子は促し、袖を引いて家の裡に引きずり込み、戸を閉めた。
家の裡は、闇であった。
「やがて舞が果てれば、鏡郎女は戻ってくる」
葛城皇子は囁いた。
「戻って来たら、如何する？」
おずおずと問う大海人皇子に、葛城皇子はこともなげに応えた。
「姦す」
闇のなかで、葛城皇子は、その精悍な面差しを、大海人皇子に向けた。
「汝もともに、姦せ」

やはり……。大海人皇子は思った。葛城皇子は、彼等と同じだ。伊勢の小楯。それに蘇我鞍作。
平然と女を姦し、まぐわい、なんら悔いることなく、また他の女と交わる。
小楯は、女なら誰でも、位の高い男とまぐわうことを欲していると言った。蘇我鞍作は、大王の位を奪うため、老いたる女王とまぐわった父なる田村大王を褒め称えた。
同じ田村大王の血を引く葛城皇子は、平然と禁忌を侵して内裏に忍び込み、大王に仕える鏡郎女を、二人して姦そうと言う。
小楯と三人の伴部を独りで打ち倒した亜那。その亜那に矛で打ち懸かられ、剣を抜くこともなくかわし、打ちのめした鏡郎女が、たやすく姦されるとは思えなかったが、そのことを、今日会ったばかりの異母兄に告げるべきか……。大海人皇子は迷った。

来た……。迷ううちに、葛城皇子が呟いた。
外で、庭の土を踏む足音が響き、女どもの声が飛び交った。やがて、家の階梯を登る音がして、戸が開いた。暗闇がぱっと照らされた。
火が灯った藁の芯を油を浸した土器を手にした鏡郎女が立っていた。

「ぐ！」
傍らでうめき声が漏れた。鏡郎女はいつの間にか、身を接するばかりに詰め寄り、その右の膝が、葛城皇子の股間に食い込んでいた。
葛城皇子は白眼を剥き、床にくずおれた。
「汝は……」
手にした燈は消えていなかった。鮮やかに葛城皇子を倒した鏡郎女は、怯えて壁に背をつける大海人皇子を見て哄笑した。
「大海人皇子ではないか」
鏡郎女は、背を折ってしばし笑い続けた。
「疾う……」
やっと笑いを収め、郎女は言った。
「この者を背負って、外へ出でよ」
指さしていたのは、床にくずおれ、かすかに震える葛城皇子だった。
「亜那に会うために、ここに忍んできたのであろう」

ほの暗い燈に照らされた郎女の貌に、笑みが浮かんでいた。その笑みに、ひとを蔑む歪みの色はなく、眼にはあたたかな光が湛えられていた。
「亜那は、この板蓋宮にはいない」
郎女の言に。大海人皇子は足を踏み出した。
「……では、いずくに」
「言えぬ」
鏡郎女は、瞬時に冷たい面差しをつくり、言った。
「疾う、宮の外へ」

大柄な葛城皇子を抱え、酔って騒ぐ警護の兵をごまかし、門をくぐり出た大海人皇子は、外で待っていた舎人どもに命じ、葛城皇子を河辺の己が宮に運んだ。
やがて意識を取り戻した葛城皇子は、しかし、ひどく痛む股間を押さえ、褥の裡で七転八倒していたが、やがて寝入った。
翌朝。同じ寝屋で眠った大海人皇子が目覚めたとき、葛城皇子は、壁に背をもたせかけて坐し、しきりに、腹部を撫でさすっていた。
大海人皇子の伴部が運んできた椀の水を飲み干した葛城皇子は、やっと笑みを作って言った。
「危うく、殺されかけた」
薬師を呼ぶか、と言った大海人皇子を、葛城皇子は手で制した。
「大王家の皇子が、女にふぐりを蹴られたと噂が拡がっては、後々の妨げとなる」

弟なる皇子よ、と葛城皇子は、苦しげな面持ちをせいいっぱい緩めようとしながら言った。
「汝は、あの女……鏡郎女を伊勢で見たことがあったか」
大海人皇子は、咄嗟に応えることができなかった。
「大王家の皇子でありながら、独り僻地に育つと、そういう面差しを作れるようになるのか」
葛城皇子は、じっと大海人皇子を見つめつつ言った。
「心の裡を読まれぬような面差しを」
笑みを作ろうとして、ますます面差しが強張る大海人皇子から眼をそらし、葛城皇子は続けた。
「尾の国や伊勢、伊賀で采女を求めていた膳臣が、飛鳥への途上死んだ。女に、ふぐりを蹴り砕かれた、と聞いた」
大海人皇子の肩がびくりと動き、その肩に一瞬、葛城皇子の鋭い眼差しが飛んだ。
「蹴り砕いた伊勢の乙女を、鏡郎女は飛鳥に随れて来た。汝は、その経緯を知るや」
急いで首を横に振った大海人皇子に、葛城皇子は微笑んだ。
大海人皇子は、総身が強張るのを覚えた。もしや、異母兄は、亜那のことを知っているのだろうか。
「ただの噂だ。まことか否かも分からぬ、ただ……」
葛城皇子は、喉を鳴らして笑った。
「弟なる皇子よ、汝は土蜘蛛を聞いたことがあるか？」
つちぐも？　大海人皇子は、貌を上げ、唇を半ば開き、しかし声は出なかった。喉が乾ききっていた。おそらく、策を尽くして、さまざまな噂を集めているらしい葛城皇子が、亜那のことを

知っているかどうか、皇子は息を詰めて、耳をそばだてていた。
「かつて、国栖のあたりに、土蜘蛛と呼ばれる女のみが住まう邑があったという。その邑の女どもは皆、武術に優れ、矛でも剣でも、否、素手でも男を打ち負かすほどであったとか」
いつしか、葛城皇子は、天井のあたりに眼差しを彷徨わせて、不敵な笑みを浮かべていた。
「土蜘蛛の邑はいつしか滅び、跡形もない。しかし弟なる皇子よ、誰かが飛鳥のうちに、密かに新たな土蜘蛛の邑を作っているとすれば如何ぞ。その土蜘蛛の邑を自在に差配できれば……そう、思わぬか」
男は、女というだけで油断をする。優れた武術を持った女を敵対する者に潜ませれば、数百の兵を差し向けるよりたやすく、敵の命を奪うこともできる。寝屋のうちで女と対した男ほど、脆い者はない。
「寝屋のうちにて、ふぐりを砕けばよいのだから……」
喉を鳴らして笑う葛城皇子を見つめつつ、大海人皇子の思念は、別の所にあった。
亜那が、土蜘蛛の邑に……。胸が詰まり、息苦しさを覚えた。
「兄なる皇子よ」
しわがれた声を振り絞った。
「では、鏡郎女こそ、その土蜘蛛の邑を、この飛鳥のいずくかに作っていると……」
それには応えず、葛城皇子はつぶやいた。
「女は、姦せば、男の命ずるままに動くもの……」
葛城皇子の手は、いつしか腹部から股間に移っていた。

数日の後の深夜。突然、大海人皇子の門が激しく叩かれた。
「葛城皇子である」
舎人どもが慌てて門を開けると、葛城皇子が独り、馬上にあった。報せを受けて門まで走り出た大海人皇子に、葛城皇子は怒鳴った。
「馬を。疾う行くぞ」
「いずくへ？」
すでに更けた夜空を見上げながら、大海人皇子は問うた。
「三輪だ」
「三輪のいずくに？」
「三輪といえば、山」
皇子は驚いた。三輪山へは、この河辺から十里（約8キロメートル）以上も北。夜中に馬を走らせるには遠すぎる。
「鏡郎女が今宵、内裏を出て、三輪に還る」
声をひそめた葛城皇子に、大海人は思わず身を乗り出し、馬上の異母兄に問うた。
「誰からそれを……」
「板蓋宮のうちにも、吾が手の者は潜ませてある」
唇を歪めた葛城皇子は、ぴんと胸を張り、命じた。
「弟なる皇子よ、疾う、馬を！」

三輪山は、高さ五町（約450メートル）、山裾の周囲は三里（約16キロメートル）に及ぶ、円錐形の山である。山全体が大物主の神の依ります聖域であり、足を踏み入れるには、山を守る三輪の長の赦しを得ねばならない。
その麓に、一里（約540メートル）四方もある人工の池が掘られ、その中央に、長さ半里ばかりの巨大な前方後円墳が築かれていた。箸墓と呼ばれるその塚は、いつ築かれたのか、すでに草木に覆われている。
柵をめぐらした池の畔に、小さな門が作られている。門をくぐれば、小舟が繋がれて塚までの橋をなしているが、陵戸どもが二人、寝ずの番をして人の出入りを禁じている。
「この塚に葬られたのは、百襲媛といい、大王家の皇女であったが、大物主の神とまぐわい、その後に、己が陰を箸で突いて死んだという」
いななきが聞かれぬよう、離れた林に馬をつなぎ、草陰に身を潜めて、葛城皇子は囁いた。
「信じるか、弟なる皇子よ」
「何を？」
「百襲媛の物語を」

箸墓古墳（奈良県櫻井市）

大海人皇子は口を噤(つぐ)み、しばし考えた。亜那に聞いた昔語りには、なかった。
「あるいは、何故に、百襲媛は己が陰を箸で突いて死なねばならなかったのか、汝にはわかるか？」
無言で首を振る大海人皇子を一瞥もせず、葛城皇子は、夜空を見上げて言った。
「飛鳥の史人(ふひと)の昔語りはわからぬ事が多い。何かを隠している……」
そのとき、遠くで馬蹄の響きが聞こえてきた。

月明かりに照らされ、しだいに近づいてきた黒い影は、馬を走らせる女だった。袴(ズボン)をつけ、剣を腰に帯び、結い上げた髪を後頭部で垂らし……。
「来た……」
葛城皇子は立ち上がった。
鏡郎女は、池の畔(ほとり)の門の前で馬を停(と)めた。陵戸の一人が駆け寄り、手綱(たづな)をとった。馬から降りた郎女が門をくぐろうとした時、葛城皇子が走り寄ってきた。
「誰(たれ)ぞ！」
陵戸が矛を構えて突きつけた。
「葛城皇子である！」
陵戸どもは貌を見合わせ、ついで鏡郎女を見た。
「皇子よ」
鏡郎女は唇を歪めて微笑んだ。
「もはや、ふぐりは痛まぬのか？」

「痛む」
葛城皇子は、右手で股間を握って見せた。
「だが、汝に会えるとなれば、痛みなどに構っていられない」
「二度も禁忌を冒(おか)すのか」
鏡郎女は、ゆっくりと葛城皇子に歩み寄った。
「ふぐりを砕かれるやもしれぬぞ」
「それが」
葛城皇子は笑った。
「土蜘蛛のやりようか？」
鏡郎女の面差しが、一瞬凍り付いた。すぐに笑みを作ったが、刺すような眼差しで、皇子を見つめた。
「土蜘蛛の邑……。板蓋宮(いたぶきのみや)の史人(ふひと)どもの伝える書(ふみ)には記されてはいまい。汝は土蜘蛛が事、あるいはその邑が事をいずくにて知った。甘樫丘(うまかしのおか)なる蘇我(そがの)が邸の蔵で読んだのか」
やや離れて、大海人皇子は、呆然と異母兄の言に聞き入っていた。蘇我大臣の蔵……。板蓋宮に近く、甘樫丘に砦(とりで)のごとく聳(そび)える蘇我の邸の蔵に、何があると言うのか。
葛城皇子は、途切れることなく喋り続けた。
「鞍作は幾度、禁忌を冒した？　大臣は幾度(いくたび)、大王が寝屋に入った？　この舟橋を渡り、橋墓が塚へ、否、三輪の御山に幾度、足を踏みれた？　汝は、禁忌を冒した蘇我鞍作のふぐりを砕いたか！」

大王の寝屋に、蘇我鞍作が……。
あり得ないことではなかった。七十を越える炊屋大王とまぐわった父なる田村大王を褒め称えた鞍作がそれに習い、宝皇女の寝屋に忍んでゆき、権勢を押し広げようと策をめぐらしても、不思議はない。
「母なる大王は、鞍作に惑わされ、この三輪の地に、新たに土蜘蛛の邑を作ろうとされているのであろう。しかし郎女よ、果たして、母なる大王や蘇我大臣の後ろ盾など、さほど盤石なものと汝は信じているのか」
葛城皇子の眼に、激しい炎が灯っていた。左右の拳が握りしめられていた。
鏡郎女は、じっと眼をそらさず葛城皇子を見つめ、ややあって口を開いた。
「この舟橋を渡って、生きて還れるか否か、分からぬ。それでも皇子は渡るのか」
「渡る」
「何故に？」
「母なる大王を姦したあの男を殺すためならば」
鏡郎女は、蘇我鞍作への憎悪に総身を振るわせる葛城皇子を見つめ、やがて唇を緩めて微笑んだ。
「来よ」
それから、大海人皇子に冷たい眼差しを向けた。
「大海人皇子は、入れることはできぬ」
「諾」

葛城皇子はうなずき、大海人皇子に命じた。
「汝はすぐ、河辺へ還れ。この事、誰にも言うな！」
二人の姿は、揺れる舟橋を伝い、塚のなかへと消えた。

大海人皇子は、宮へは還らなかった。
池の畔に腰をおろし、ひたすら待った。
陵戸どもが互いに目配せしあい、囁きあうのを顧みもせず、じっと坐したまま動かなかった。
葛城皇子の言葉を反芻するうちに、朧げながら、飛鳥の都で繰り広げられている争いの一端を垣間見たように思えた。
蘇我鞍作は、宝大王とまぐわい、ともに手を携え、なにごとかをなそうとしている。この三輪の地に、新たな土蜘蛛の邑を密かに作ろうとしている。母なる大王とまぐわった鞍作を憎む葛城皇子は、土蜘蛛の邑の采配を任された鏡郎女を姦すことで、土蜘蛛を掌中におさめようとしている。
何のために……。
そして吾は？　前触れもなく吉野宮を訪れた鞍作。鏡郎女を姦そうとする企みに引き入れた葛城皇子。それぞれに策を練り、その策のなかに、大海人皇子が、如何なる形で組み入れられているのか……。彼等は吾に、何を希んでいるのか。
十四歳の皇子に、その先を読むことはできなかった。

眼を覚ますと、すでに払暁が近かった。
いつ、眠ってしまったのか……。身を動かそうとしたが、寒い夜気に凍え固まった躯は、少しよじっただけで激しい痛みが生まれた。
やっと立ち上がり、池に浮かぶように聳える箸墓の塚を見た。青い闇のなかに、女の乳房のように、二つのまるい盛り上がりが、なだらかな曲線を描いていた。
その塚から、一艘の舟が、池の水面を滑るようにこちらに近づいてきた。舟を漕いでいるのは、鏡郎女と同じ装いの乙女であった。
乙女は舟を岸に寄せると、船底に向かって身を屈めた。抱き上げたのは、葛城皇子だった。陵戸どもが駆け寄り、乙女から皇子を受け取り、二人して門の外に運んだ。乙女は、再び舟に乗り、塚に向かって漕ぎ去った。
大海人皇子は、陵戸どもが地に寝かせた葛城皇子に駆け寄った。袍のところどころが裂け、額に唇に血をにじませ、貌は赤黒く腫れ上がっていた。
「兄なる皇子よ！」
肩をつかんで揺すぶると、葛城皇子は、重たげに瞼を上げ、わずかに唇の端を歪めて笑った。
「みごと……姦したぞ」

葛城皇子の全身には、至る所に撃たれた傷が残り、ことに、陽物の皮は破れ、ふぐりは醜く腫れ上がっていた。
皇子は、箸墓の塚で何が起こったかを、大海人皇子にも語ることはなかった。蹴鞠の仕合で大

傷を負い、紀の国の湯に浸かって療養しているものとされ、しばらく人前に姿を現さなかった。
同じ頃、宝大王が病に臥せった。月に六度開かれる朝議は三月にわたって中断し、飛鳥の政事は停滞した。
そして四月、久しぶりに朝議が開かれた。十五歳の大海人は招かれることはなかった。

板蓋宮の太極殿に集った群臣はどよめいた。ただ独り、大臣の蘇我鞍作のみが、静かな面持ちを保っていた。
「吾はさきごろ病に臥せ、ために飛鳥の政事の妨げとなった。かつて炊屋大王、厨戸皇子を摂政となし、蘇我馬子を大臣となし、三人手を携えて政事を行い、ために大和は栄えた。吾も、その故事に習い、新たに大王家より摂政を選び、蘇我大臣と三人で政事を司る」
そして、宝大王は、摂政となる一人の皇子の名を口にした。
古人皇子。
かの、炊屋大王の孫。血筋で言えば、田村大王と宝大王が実権を握ってより、すでに政事の中心にはなかった。齢は三十。摂政の任に着くにはふさわしい年齢だが、とくに勲功があるわけではない。
古人皇子は、蘇我鞍作が娘とまぐわい、子をなされたらしい……。
朝議が終わって後、群臣はそう囁きあった。
かの厩戸皇子が摂政になったのは十九歳。大王の御子たる葛城皇子もはや十九歳。何故、葛城皇子が摂政にならぬのか……。

葛城皇子は黙して語らなかった。ただ、朝議の翌日の夜、皇子の宮に、中臣鎌子(なかとみのかまこ)が伴もつれず、密かに訪れた。

「三輪より報せが来た」

中臣鎌子は、唇のみを動かし、なんの感情も貌に乗せぬまま告げた。

「安見娘(やすみこ)よりか」

葛城皇子は、寝屋にただ二人で向き合い、問うた。安見娘は、鏡郎女とともに内裏にて大王に仕える乙女。内裏の内情は、鏡郎女より、安見娘を通じて中臣鎌子にもたらされ、さらに葛城皇子に伝えられる。

中臣鎌子は、炊屋大王の御代、蘇我馬子と争い、敗れて衰えた中臣氏の末裔。かつて大王家に、呪をもって仕え栄えた中臣の家を、再び栄えさせるため、葛城皇子に近づいた。

「やはり」

鎌子は、低く囁くように言った。

「大王は、懐妊しておわします」

葛城皇子の眉根が強張った。

「鞍作が子か……」

「然り」

鎌子は頷いた。

「病で臥せっていたとは、おそらく悪阻(つわり)のため。朝議を開いたは、悪阻が終わり、ぶじ、御子をお産みになる目処(めど)が立ったがためかと」

鞍作めが！　葛城皇子は、床を拳で撃ち、烈しく罵った。

「母なる大王は、亡き田村大王との間に生まれた吾ではなく、蘇我大臣との間に生まれる子を大王となすため、古人皇子を摂政となし、いずれは大王の御位に即け、鞍作が子の成長を待ち、やがて日継(ひつぎ)の皇子(みこ)となさんとの心算(こころつもり)なるか！」

葛城皇子は、頬を紅潮させ、しかし、次第に落ち着き、策を巡らしつつ語った。

「その間、蘇我鞍作は、摂政の外戚として、母亡き後は古人大王の外戚として、己が権勢を保ち続け、飛鳥の政事を一手に収めようとの策か」

鎌子は頷いた。葛城皇子の唇が不敵に歪んだ。

「鎌子よ」

葛城皇子の眼が、蹴鞠の仕合のさなか、鞠を抱えて敵の旗へと駆ける時のように輝いた。

「難波(なにわ)にいます叔父に報せよ。ついに、かの策を行う時が来た、と」